

Title	『形而上学』Z-H巻における実体概念の研究
Sub Title	A Study on Aristotle's concept of substance in the Metaphysics books Z-H
Author	牛田, 徳子(Ushida, Noriko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	1985
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.17 (1985. 12) ,p.51- 74
JaLC DOI	10.14991/005.00000017-0051
Abstract	アリストテレスの『形而上学』Z-H巻は主として定義問題を通じて実体概念を検証する弁証論である。まず、付帯性の定義可能性が否定されることによって「第一義的に、端的な定義、および本質は実体にある」ことが要請される(Ⅰ節)。次に、質料と形相が結合した実体の定義可能性が吟味され、質料の不可規定性より生じる困難が指摘される(Ⅱ節)。さらに、実体を普遍とみなすなら「第三の人間」パラドックスが生じ、個とみなすなら定義は成立しない困難が指摘される(Ⅲ節)。以上の困難は、実体が存在論的な一性を有する事物であることによって解決される。一つの事物においては、質料の可能態本質は形相の現実態本質と同じである。したがって、実体を或る場合は個別的主語として表現し、或る場合は普遍述語として表現すると言表上約束することは、存在論的レベルの実体を前提し、それと混同しないかぎりにおいては許容されよう(Ⅳ節)。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000017-0051

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『形而上学』Z―H巻における実体概念の研究

牛 田 徳 子

要 旨

アリストテレスの『形而上学』Z―H巻は主として定義問題を通じて実体概念を検証する弁証論である。まず、付帯性の定義可能性が否定されることによって「第一義的に、端的な定義、および本質は実体にある」ことが要請される（Ⅰ節）。次に、質料と形相が結合した実体の定義可能性が吟味され、質料の不可規定性より生じる困難が指摘される（Ⅱ節）。さらに、実体を普遍とみなすなら「第三の人間」パラドックスが生じ、個とみなすなら定義は成立しない困難が指摘される（Ⅲ節）。以上の困難は、実体が存在論的な一性を有する事物であることによって解決される。一つの事物においては、質料の可能態本質は形相の現実態本質と同じである。したがって、実体を或る場合は個別的主語として表現し、或る場合は普遍述語として表現すると言表上約束することは、存在論的レベルの実体を前提し、それと混同しないかぎりにおいては許容されよう（Ⅳ節）。

はじめに

アリストテレスの『形而上学』のなかで、或いはむしろ彼の全著作のなかで、Z―H巻ほど研究対象としてもっとも

重要とみなされながらも、テキストとしてはこれほど解読困難なものはないと言ってよいであろう。

両巻が古来もっとも重要視されるのは、それが実体概念（これがアリストテレス哲学を成立させる基礎概念であるの
は言うまでもない）をテーマにしており、著者がこの概念の究明に全精力を注いでいるのがありありと感じられる箇所
はここよりほかになからである。「実体」^{エンテ}は既成の第一次概念としてアリストテレスに与えられているわけではな
い。彼は先行思想に立ち向かって、自らの全思考が拠つて立つ概念をあらたに選択することを決意し、可能なかぎりの
批判にそれが耐えうるかどうかをZ-H巻で検証しようとしていると思われる。⁽²⁾この作業は一見したところでは相反す
るけれども、しかし根本では一つになる二面を持っている。それは一面では、吟味に次ぐ吟味、あたかも果てしなき探
索の執念そのものであって、一定の結論が出てくるような推理のごとき性格のものではない。しかし、そのような作業
は、新しく立てられるべき基礎概念がそれを必然的に要求するからには、まさしく哲学的作業にはかならないのである
から、この面ではアリストテレス哲学そのもの——或いはそれをもっとも基本的に代表するもの——であるはずであ
る。ここにZ-H巻の真の重要性と困難性がある。

しかしさらに、両巻の研究のためにべつの技術的な問題があることをここで指摘しておかなくてはならない。それは
『範疇論』の取扱い方である。この小品では周知のとおり、「実体」を「第一実体」と「第二実体」に再分類し、それ
ぞれに個と普遍の二義を担わせている。しかしアリストテレスの他の作品ではこのような実体範疇の扱い方は見当らな
い。『形而上学』Z巻に現われる「第一義的な実体」はあきらかに形相を意味していて、『範疇論』の用法とは無関係
である。『範疇論』が古来真作とみなされ、しかもそこには「実体」についての、きわめて単純、明快にみえる叙述
(5章)があることから、人々はつねにこの作品を念頭においてアリストテレスの実体概念を考えてきた。それは『形

而上学』Z-H巻の解釈においても例外ではない。両書のあいだにある隔りは適当な解釈によって埋められる程度のマインナーなものだと人々はみなしてきた。

今世紀前半の最大のアリストテレス注釈家と言ってよいD・ロスもむしろその一人であって、彼の解釈は今日にまで影響を与えている。しかし彼の解釈には二つの異なる見方が共存している。一つはZ1の注釈で彼が述べているように、実体概念には二義があつて、一つは事物に内在する普遍の本質のことであり、他の一つはそれ自体で存在する個別的基体のこととする見方である。ロスは、この両義性はアリストテレスの全著作を通じて存続し、呼び名においては異なるものの、もっとも初期の『範疇論』においても——「第一実体」と「第二実体」の名で——、もっとも後期のZ巻においても——「或るこれ」と「何であるか」の名で——、変わりなく保存されていると言う。⁽⁴⁾この見方に従つて彼は、実体は勝義に個別的なものであることを支持している。⁽⁵⁾いま一つの見方は、アリストテレスの実体観は、初期においては感覚的個物を意味する「第一実体」から、後期のZ-HΘ巻においては純粹形相を意味する「第一実体」、ないしは「最低種」へ移り変わった、とするものである。⁽⁶⁾この見方に従えばアリストテレスの「実体」は個概念から種概念へ変遷したことになる。ロス自身、以上の二つの解釈をどう調整しようとするのか、それはどうでもよい。とにかく彼以後のZ巻解釈の大半は以上のような二つの見方に倣っている。それらは大小同異はあつても三種類にわけられる。一つは実体は感覚的個物であるとする解釈、⁽⁷⁾第二は普遍的種とする解釈、⁽⁸⁾第三は「実体」の二義をアリストテレスのジレンマとする解釈である。⁽⁹⁾

『範疇論』を真作とみなすか、偽作とみなすかの問題はもちろんZ-H巻研究とは別問題である。むしろそうだからこそ、私は本稿で『範疇論』の記述とはかかわりなく、また制作年代の問題ともかかわりなく、Z-H巻にだけ見出さ

れる、アリストテレスの「探索の執念」を辿ってゆきたいと思う。彼は両巻を通じて明らかに実体の定義問題にこだわっている。それは難問に次ぐ難問を生み出す。「実体は何か普遍か」の問題も定義問題のなかでこそ生じる。アリストテレスが最終的にどう解決しようとするか。それが彼にとって「実体とは何であるか」が究明されることだとするのが本稿の解釈態度であり、また課題である。

I 実体にとりわけ定義と本質がある

アリストテレスはZ 4 からただちに「本質」問題を取上げ（注（2）参照）、事物の本質を言表可能性から（1029b13: *hoykōs*, 1030a27: *tiōs dei kēyēn*）検討することになっている。

彼はまず、事物の本質は次のような条件をみたす言表によって表わされ则认为。逆に言えば、そのような言表によって事物が表わされるならば、事物に本質があるとみなしてよいということである。

（1）対象がそれ自体においてまさにXであると語られること（1029b14）

（2）言表が対象自体を含まず、対象自体を語っていること（b19-20）

そして彼は付帯性に本質があるかどうかを吟味する。付帯性にはつねにその基体になるものがあり、付帯性は基体と結合する性格のもの（たとえば、白い・人間）であるから、付帯性が言表されるには次の二通りの仕方がある。

（i）対象自体（白い）が他のもの（人間）に付加されることでXであると語られる。この場合Xは「白い人間」の意義を与えるだろう。

(ii)対象自体(人間)が、他のもの(白い)がそれに付加されることでXであると語られる。この場合Xは「白いもの」の意義を与えるだろう (1029b31-34)。

(i)の場合は対象と異なるものが余計に語られるから、Xであることは対象それ自体においてない。(ii)の場合は対象と異なるものが対象のこと(白くあること)を語るだけで、対象それ自体(人間)を語らない。したがって或る付帯性を語る場合も、或るものを付帯性によって語る場合も、それぞれ本質的言表になっていない。

以上の検討の結果、アリストテレスが得たものは「本質は、或るこれ(実体)がまさにそれであるところのものである⁽¹⁰⁾」という言明である(1030a3)。彼の思考は以下のとおりである。「他のものが他のものについて語られる」仕方、つまり付帯性におけるように、それについて他のものが語られたり((i)、他のものについてそれが語られる((ii))仕方は、対象自体のまさにそれであることを表わしえない(1030a3-4)。ところで「まさにそれであるところのもの」を表わす言表を定義と呼ぶところから、「本質は、それらの言表が定義になるところのものにある」(1030a6-7)。付帯性がそのような言表を受け入れないことはすでに検証されたのであるから、残るのは実体がそれを受け入れることである。したがって「第一義的にして、端的な定義、および本質は実体にある」と弁証される(1030b5-6)。これがひとまず、アリストテレスが本質の言表可能性の吟味から得た、実体に関する一つの要請である。

ここで彼は次のような注意を与えている。一義を担う一つの名があるなら、そういうどんな名にも定義があるとみなしてはならない。ただ一つのものの意義が定義になる。「一つのもの」とは「一」が「存在」^{オン}と同じだけの仕方^{オニス}で語られるものである(1030b7-11)。つまり各範疇に属するもののことである。ところで実体以外の範疇のものは、実体に対して「一つのものとの関係」^{πρὸς τὸ ἓν}にあることによってそれぞれ存在と言われ、一つと言われる。それゆ

え実体は第一義にして、端的な存在であり、一つのものである (T2. 1003a33, Z1. 1028a29-31)。したがって実体以外の範疇のものにも第二義的に、条件的に本質があり、定義もあろう。しかし第一義に、端的には本質と定義は実体にあるはずである。

アリストテレスがここで「一つのもの」ということをどう考えていたのか理解する必要がある。彼は Z 17 で「X が X であるのはなぜか」と問うのは、X が X であることは自明だから無用である、ただそう問うことで、それぞれのものは自らと不可分であって、このことこそそのものの一つであることだ、と言おうとするのであるなら話はべつである、と言っている (1041a4-19)。X イコール X は自明であらう。しかし X であるものはかならずしも X であることと一致するわけではない。白い人間は白くあることと完全に一致するとは言えない。X であるものが X であることと一致するのはどういふ場合か。言い換えれば、それぞれのものと本質は同じか異なるか。このことがアリストテレスにとって事物は一つであるかどうかということの意味である。

彼は Z 6 でこの問題を取上げて、それを検討することは実体の研究に貢献すると言う。「なぜならそれぞれのものは自らの実体にはかならないと考えられ、そして本質はそれぞれのものの実体であると考えられているからである」(103a17-18)。ここで彼は実体概念に対して二つの考え方があることを示唆している。一つは、実体とはただちにそれだけの事物のことであるとする考え方、いま一つは、実体はそれぞれの事物における本質のことであるとする考え方である。

彼はイデア概念を取上げて次のように論じている。イデア論者にとってそれぞれのイデアは、それとは異なる実体があるに先立ってあることがないような実体である。もしイデアが本質と異なるとすれば、いやしくも本質が実体である

以上、イデアには他の実体、すなわち他のイデアが先んじてあることになる(1031a29-b3)。なぜなら「本質は、それぞれのもがそれ自体においてまさにそれである」と語られるところのそのもの」(Z4, 1029b14)であったから、本質を欠くようなイデアは自らの本質であるイデアの存在に依存するだろうからである。「かくて「善」と「善であること」、「美」と「美であること」は一つでなければならない。およそ他のものに即して語られず、自ら自体において、第一義的に語られるものは(その本質と)一つでなければならない。なぜなら、そういうものがたとえイデアでなくとも、このこと(自ら自体において第一義的に語られること)がそれに妥当しさえすれば十分だろうからである。いや、そういうものがたとえイデアであっても、と言ったほうがおそらくよいだろう」(1031b11-15)。アリストテレスがイデア概念を取上げたことにはなんらの不都合もない。⁽¹¹⁾なぜなら、Xであるものならぬ、XそのものがXであることと一致するのは必然だからである。

それゆえ実体はたんにそれぞれのものの自体のことでもなければ、たんにそれぞれのものの本質のことでもない。⁽¹²⁾それは、自ら自体において、第一義的に語られることにおいて、本質と同一であるところのそれぞれのものの、ということではない。「第一義的にして、端的な定義、および本質は実体にある」ことは以上のような意味において理解されねばならない。

II 実体定義のアポリア

アリストテレスは実体に関して以上のような要請をしてにおいて、ただちに仔細な吟味にとりかかる。

彼は Z 5 で、いわゆる自体的属性の定義の問題を取上げる。Z 4 で取上げられた白と人間の例は、いずれの一方も他方を意義のうちに含んでいないから、両者の結合は任意であって、そこからなんらの自体的な言表も得られないのは当然であろう。しかし付帯性のなかには基体と必然的に結合する属性がある。たとえば、ソクラテスが獅子^{シーモン}鼻であることが彼のトレードマークであるにしても、ソクラテスとシーモンの結びつきは偶然である。しかし彼の鼻とシーモンの結びつきはそうではない。なぜなら或る鼻がシーモンであるのは、その鼻それ自体における事態だからである。⁽¹³⁾したがってシーモンは基体ソクラテスに付加されて語られることが必然でないなら、シーモンそれ自体のうちにシーモン性、すなわち「凹んだ鼻であること」を持っているのかもしれない。類似の例は、数の奇、偶、動物の雄、雌などである。

「シーモン」はアリストテレスが愛好する類型例^{パラダイマ}の一つである。彼がこの表現を好むのは、アカデメイアの謂れもさることながら、「凹んだ・鼻」という複合的な意味を一語で表わしているからであろうと思われる。⁽¹⁴⁾つまり、アリストテレスにとっては、それは一つの名であるからといって、かならずしも一つのもの^{もの}を指すとはかぎらないことの類型例なのである。この語は Z 5、10、11 に現われるけれども、その都度アリストテレスの用法は異なる。私は Z 巻の「シーモン」用法の推移に注目したいと思う。

Z 5 におけるシーモンの問題に対するアリストテレスの解決は以下のとおりである。シーモンはその直接的基体、鼻の意義^{ロゴス}を含んだ属性であって、それ自体がすでに基体に付加された複合である。つまりシーモン性は鼻における凹みであって、凹みそのものと同じでない。その証拠に、「シーモン鼻」と言えば、その意義は「凹んだ鼻である鼻」(または「鼻の凹みを持つ鼻」と、鼻を余計に繰返す不合理が生じる。それは、どんな属性も十分な意義^{ロゴス}を持たず、それとは異なる基体を語ることなくしてはそのものの意義^{ロゴス}も語れないからである (1030b23-1031a1)。したがって自体的属性

も「他のものが他のものについて語られる」付帯性に属するのであって、それは本質的言表（定義）を受け入れることができない。ここでも「実体にとりわけ定義がある」という主張は有効である（1031a1-14）。

アリストテレスは Z 10 からいよいよ実体の定義問題を取上げる。彼の吟味は次のような問題提起から始められる。もし定義が事物に対応する言表であるならば、言表の部分は事物の部分に対応するはずである。そして事物の全体の意義はその部分の意義を含んでいて、そのかぎりそれら部分なしには語られないはずである。したがってそれらの部分は事物の本質構成要素であって、論理的には全体に先行している。しかしながら事物には次のような部分もある。すなわちその意義が全体の意義を含んでいて、その逆でないもの、したがってそれを語るためには全体を語ることなくしては不可能であり、そのかぎり論理的に全体に後行しているような部分である。たとえば円の円分、人間の指がそうである（1034b30-32）。第二の種類の部分もまた当然、全体の部分である。それらを尽してゆけば（指、手、足、頭などを取ってゆけば）全体（人間）が構成される。それは、付帯性が尽されても基体が構成されないのとは事情がちがう。もし実体が定義可能であるなら、以上の二種類の「部分」が実体のレベルで区別されていなければならないのは当然である。

この問題に対するアリストテレスの解答は以下のとおりである。まず、質料と形相と両者の結合したものがそれぞれ実体と呼ばれることがあるのだから、「実体の部分」と言っても「実体」の取り方いかんで異なる。質料が部分と言われるのは結合実体の部分という意味であるが、形相の意義を構成しているものは実体としての形相の部分という意味である（1035a1-4）。そして定義を構成する第一の種類の部分が対応するのは形相の部分にあたり、定義を構成しない第二の種類の部分が対応するのは結合実体の質料的部分——結合実体がそれへと分割され、減びゆく部分——にあたる（1035b11-14）。こゝでアリストテレスはふたたびシーモンの例をあげて、鼻の肉はそこに凹みが生じるところの質料

だから、凹みの部分ではなくて、シーモンの部分であると言う (1035a4-6)。Z 5 の議論で使われた「シーモン」が属性 (鼻における、鼻の凹み) であったのに対して、ここでは結合実体 (凹んだ鼻) に比せられ、鼻はかしこでは属性の基体であったのに対して、ここでは質料 (形相の基体) に比せられている (1035a25-27)。このような転義と類比はアリストテレスにとっては正統な方法である (*Met* Θ 6, 1048a35-b9, *Phys* A7, 191a7-12 参照)。

以上から、事物が定義されることとは、その事物の形相が定義されることであり、形相が部分を持っているなら、その全部分の意義が尽されることだということになる。それに対して事物の質料は定義の対象から除かれる (捨象される)。それはそれ自体としては不可知であり (1036a8-9)、形相の意義によって語られるほかないものである (H3, 1043b30-32, cf. Z3, 1029a20-24)。したがって結合実体さえも定義の対象になりえないだろう。なぜならそれは定義されない質料的部分を含んでおり、それへと解消、滅亡するものだからである (1036a5-7)。したがって厳密に言えば、生成も消滅もその本性に含まれない形相⁽¹⁶⁾だけが定義されるものということになる (cf. 1035a28-30, Z15, 1039b23-26)。Z 10 の記述はつねに明瞭だとは言えないけれども、すくなくともさきの問題提起から生じた議論の結論はほぼ以上のようなことだと思われる。

それでは形相の部分とは何か、これが Z 11 の冒頭で問われる。「どのような部分が形相の部分であり、どのような部分がそうでなく、結合した実体の部分であるのか、これが問題になるのは当然である……もしこれが明らかでない」と事物の意義も明らかにならないだろう」 (1036a25-31)。しかしそれにつづく章の部分 (1036a31-1037a10) では、アリストテレスはこの問題に対して直接解答になるようなものを与えていない。むしろそこに見られるのは、さきの Z 10 の結論——形相のみが定義され、結合実体は定義されない——に対する、切れ切れない反省、反論のようなものであって、そ

こからなにか結論じみたものを引出すのは困難である。ただ、彼がそれまでの議論をまとめている章の終りの部分が辛うじてわれわれの理解に役立つと思われる。

アリストテレスはそこで、Z 4 〳 6、Z 10の主題が何であつたかに触れ、実体の意義に質料的部分が含まれないのはそれが結合実体の部分だからである、と、Z 10の結論を繰返している。そして次の点を付け加える。結合実体には意義が或る意味であるとも言えないとも言える。つまり、(1)それが質料とともにあるなら、質料は定義されないものだから意義はない。(2)しかし第一義的な実体(形相)に即してあるならば意義はある。なぜなら、と彼は言う、実体は内在する形相であつて、それと質料とから生じた結合物が(その形相によって)実体と言われるからである。たとえば、凹みがそうであつて、これと鼻とから生じるのがシーモン鼻、シーモン性である。なぜならそれらには鼻が二度あることになるからである、⁽¹⁷⁾と言う(1037a26-32)。

ここでシーモンが三度目に登場している。私は、さきのZ 10の議論ではたんに「シーモン」が凹み(形相)と鼻(質料)の結合実体に比せられていたのに対して、ここでは「凹んだ鼻である鼻」である「シーモン鼻」が結合実体に比せられているのに注目したい。Z 10の「鼻」が捨象されるなら残るのは「凹み」だけである。しかしここでは、二つ目の鼻が捨象されても、もう一つの鼻が凹みと結びついて残るだろう。Z 5の一番目の「シーモン」が基体・鼻の意義を含んだ属性・凹みであつたように、ここでもシーモン鼻に内在する形相・凹みがほかならぬ鼻の凹み、鼻における凹みであることによって、鼻の意義を含むことになる。アリストテレスはこの用例によって結合実体の形相の意義は、結合実体がそれへと解体され、滅亡する質料的部分(いわゆる可感的質料)⁽¹⁸⁾を捨象してもなお残る質料(いわゆる可知的質料)⁽¹⁸⁾を部分として含む複合的なものであることを表そうとしたのかもしれない。

しかし、この仮設は多くの問題を含んでいる。つづくアリストテレスの言葉が、他の一切の問題がそこに帰着する、もっとも根本的な難問^{アポリ}を提出している。「第一義的な実体（形相）においてあるように、或る種のものにおいてはそれだけのものと本質は同じである……しかし質料として、或いは質料と結びついた仕方であるかぎりのものは（本質と同じでない）（1037a33-b5）。なぜなら質料の本性は「あることもあらぬことも可能」（Z15.1039b29）というものであるから、Xであることも非Xであることもできるもの（或いはそういう可能因子を内蔵するもの）はXであることと明らかに一致できないからである。したがって結合実体は自らの実体的一性を脅かされている存在である。それは同時に「一つのものの定義」を受け入れることが危ぶまれる存在である。

Ⅲ 実体は個か普遍かのアポリア

アリストテレスはZ 10からの議論のなかで「一つのものの定義」を忘れていたわけではない。「定義において、その言表^{ロゴス}に部分が含まれるのはどうしてか。そして定義が一つの言表^{ロゴス}であるのはなぜか。こういう問いが生じるのはむろん、（定義さるべき）事物は一つなものだからである。しかし、事物が部分を持っているのに、何によってそれが一つであるのか。以上のことはいずれ検討しなければならぬ」（Z11.1037a18-20）。

彼はZ 12でこの問題に対して或る程度の解決を試みようとしている（1037b8-14）。彼は分割法による定義を観察して、もしそれが二項にしぼられ、一方の項は第一の類（最近の類）であって、しかもその種から離れてイデアのように存在せず、種に対して質料のようにあるとし（1038a5-6）、他方の項はもはや差異によって分割されない、最終的な

種差であるならば、この一つの種差が事物の形相になるだろう、と言う（1038a19, 25-26）。明らかにこの案は中途半端なものである。それはさきの質料に関する難問を放置している。

しかしアリストテレスが種の定義でもって問題が解決されると思っていないことは、つづくZ 13の議論ですぐはっきりする。そこで彼は「実体とは何か」のテーマに戻ることを宣言し、普遍概念に鉦先をむける。

Z 巻において実体は種として考えられている、とする解釈は現代きわめて根強い（はじめに参照）。そしてこの見方が「普遍は実体ではない」という主題のZ 13においても否定されないことを立証しようとする試みも最近なされている。私はそれらの解釈を逐一検討するつもりはない。私はただ、人がどのように理由づけようとしても、Z 13の「普遍実体否定論」を覆えすことはできないし、Z-H巻を通じてアリストテレスの姿勢は変わらないと思う（cf. Z10.1035b27-30, 16.1040b23, 1041a4, H1.1042a21）。

Z 13で、普遍が実体でないことを彼が論じている主要な点は以下の二つである。それぞれのものの第一義的な実体（形相）はそれぞれのものに特有であり、それ以外のものに属することはない。それに対して普遍は多くのもの（したがって互いに他であるもの）に共通にあるような事態を語る。ところでそういう普遍がそれらのものの実体（本質）であるとは言えない。なぜなら、もしそうであるなら、普遍が表わす一つのこと（一義）によって、それが指す多くのものがそれら自体同一になるからである（1038b9-15）。さらに、普遍が事物の本質でなくて、ただそれを構成する内在要素を表わすと想定しても、普遍が本質とみなされていることに変わりはない。たとえば「動物」（類）が人間の本質の意義に含まれるならば、それは一種の動物（人間）の本質になるからである（1038b17-23）。

以上のような吟味から、アリストテレスは次の三つの結果を引出している。

(1) もしたたとえば人間が実体であるなら、その意義^{σ₁σ₂σ₃}のうちに含まれるどんなものもその実体ではなく、それから離れてあることもなく、それ以外の他のものに含まれることもない。個々のものとはべつに「動物」のようなものではなく、意義^{σ₁σ₂σ₃}に含まれるその他のものも同様である (1038b30-34, cf. Z16.1040b23-27)。

(2) 普遍的にあるもののどれも実体でなく、共通に述語になるもののどれも或るこれ(実体)を表わさず、これ、これ、^{σ₁σ₂σ₃}ような(属性)を表わす。さもなくば、多くの難点のうち、とりわけ「第三の人間」が結果する (1038b35-1039a3)。

(3) 以上の(1)と(2)とから難問^{アポリヤ}が生じる。かつて実体にとりわけ定義があると主張されたのに(丁節参照)、いまや実体には意義^{σ₁σ₂σ₃}も定義もないことになる (1039a14-20)。

実体普遍論者は、(1)においては、すくなくとも最低種「人間」が実体として立てられるのに支障はない、むしろそこに「人間」の意義^{σ₁σ₂σ₃}に含まれる類「動物」や種差「二本足」が実体化されることを禁ずるアリストテレスの反アイデア論的姿勢が見られる、と主張するかもしれない。しかしその主張は(2)において成立しない。「第三の人間」はアイデア論批判でも何でもない。それは普遍実体説から当然引出される難点である。なぜなら、もし普遍「人間」がソクラテスの実体であるならば、ソクラテスと「人間」に共通な第三の実体「人間」が導出されることが明白だろうからである⁽¹⁹⁾。ここでは「第三の人間」はもとより、「第二の人間」が成立する余地はない。「人間」とか「馬」とか、同様に個々のものについての述語であり、普遍であるものは実体でない。それらはこれこれの意義^{σ₁σ₂σ₃}と普遍としての質料とよりなる一種の結合である」(Z10.1035b27-30, cf. Z8.1033b24-26, Z11.1037a5-10)。

それでは普遍的結合「人間」はソクラテスについて何を表示しているのか。「人間」が「二本足の・動物」という複合的意義^{σ₁σ₂σ₃}を含むならばそれは、ソクラテスが二本足の動物であることを表わしているよう。それでは、「人間」に含まれる類「動物」が複合的意義^{σ₁σ₂σ₃}「感覚の能あ

る・生物」を含むならば、それはソクラテスが二本足の、感覚の能ある生物であることを表わすだろう。さらに「動物」に含まれる上位の類「生物」が「栄養の能ある・物体」を含意するなら、それはソクラテスが二本足の、感覚の能ある、栄養の能ある物体であることを表わすだろう。さらにまた「生物」に含まれる「物体」がもはやその類の意義を含むことができず、ただ「運動の能ある」なり、「熱・冷・乾・湿」なりの意義を持つだけであるなら、それは、ソクラテスが二本足の、感覚の能ある、栄養の能ある、運動の能ある、ないし熱・冷・乾・湿であることを表わすだろう。以上のすべてのことはまた、ソクラテスならぬ、カリ阿斯、コリスコスなどについても妥当する。したがって、普遍的結合「人間」は、二本足、感覚能力、その他さまざまな共通属性——ソクラテスが、カリ阿斯、コリスコス、その他すべての個々の人間と共有するすべての属性——を表示することはあっても、ソクラテスその人の実体を表示することは決してないのである。したがってどんな普遍述語も、種であれ種差であれ類であれ、実体的な本質を含意することはないのである。⁽²⁰⁾

アリストテレスは(3)で実体に本質はないとは言っていない。ただ実体は普遍でないから、(2)からの当然の帰結として実体の普遍定義は不可能だと言っているのである。彼はZ4から延々と模索してきた、実体の言表可能性(それは認識可能性を意味する)を犠牲にするのも恐れず、普遍実体否定論を説いている。いかなる普遍実体論もこの事実を無視することはできないと思われる。

実体が普遍でないなら、それは個であるか。前節で見たように、事物の質料的部分は定義の対象にならないこと、したがってその部分を含み、それへと滅亡するような結合実体も定義の対象にならないことがZ10で指摘されていた。アリストテレスはZ15でふたたびこの問題を取上げて、「あることもあらぬことも可能」という本性を持つ、個別的な感

覚実体には定義も論証もない、と言う。なぜなら生成・消滅するような事物は、それがいま、ここにある、と告げる感覚をまた裏切るのであって、知識が要求するような恒常、普遍、必然性をそなえていないからには、定義や論証の対象にないからである (I039b27-1040a7, cf. Z10.1036a5-7)。

かくて、アリストテレスは深刻なアポリアに直面することになるだろう。実体を個とみなしても、普遍とみなしても、その定義は不可能であり、したがって言表上からの本質の手掛りは得られない。しかしこのアポリアは、「実体は個か普遍かのいずれかでなければならない」という排中の命題を前提したときに生じる。そしてアリストテレスはこの二律背反を重々承知していたと思われる。なぜならB巻の難問集にはこの種のアポリアが提示されているからである。もし事物の原理が普遍的であるならば、存在の第一位にあるはずの実体の存在は不可能である。しかしもし原理が個別的であるならば、原理の普遍認識は不可能である (B6.1003a5-17, K2.1060b19-23)。それゆえ、アリストテレスが知らず知らずのうちに「出口なし」に迷いこんだとは思われない。もしそうでないなら、事態を逆にするほうがよい。つまり、「実体は個か普遍かのいずれかである」と容認するならば、かならずアポリアが生じる。それがどういうアポリアになるかを彼はZ巻で克明に追跡していったと思われる⁽²¹⁾。

縫れたアポリアを些細にほどこいてみせるだけでは、その努力は不毛だと言えるかもしれない。しかしアリストテレスにとって「平坦な道に進もうとする者にとっては、よく難路に足を踏みこむことが有益」なことであった (B1.995a32)。この言葉が真実であるなら、彼の思考はアポリアの究明に没頭しながら、同時にそこから抜け出る道を射程に納めていたにちがいない。

IV 解決への道

アポリアから脱出する方法がどういふものであるかを理解するために、まず「普遍的であること」と「個別的であること」がアリストテレスにとってどういう意味であったかを、すくなくとも本論の主題にかかわる範囲で正確に把えておく必要がある。

「普遍的であること」と「個別的であること」はそれぞれ或る意味で「一つであること」を意図している。まず両者とも、対象が思惟において不可分であることによって「一つであること」を意図している。そして「個別的であること」とは数として不可分であること、「普遍的であること」は種として（同様にまた類として）不可分であることを意図する（I.1.105a29-b1）。つまり「個」は数の意義^{ポゾス}を含み、「普遍」は類種の意義^{ポゾス}を含む、ともに認識論的な概念である。このことは実体概念を理解するための基本の一つだと思われるけれども、一般にはあまり注意されていないようである。たとえば、 $\Delta 6$ (101b31-33)で、「数にしたがって一つなもの」はその質料（ $\parallel$ 基体）が一つなものとして明され、「種^{エイドス}にしたがって一つなもの」はその意義^{ポゾス}が一つなもの（ $\parallel$ 一義を担うもの）と説明されているけれども、それを事物の本性（質料と形相^{エイドロス}）の区別として受け取り、さらにその区別に「個」と「種」の区別を重ねることが一般に通用している。しかしそのように理解するかぎり、人は「実体は数において一つか、種において一つか」のアポリアにつきまといわれる⁽²²⁾。

ところが、『トピカ』A7には、個をなんら意味していない「数において同じなもの」が示されている。それは、そ

れの名が多くあっても事物が一つなものの、ということである(103a9)。もっと詳しく言えば、名によっても、定義によっても、特性によっても、付帯性によっても指示されうる同一な事物のことである(103a26-31)。このような意味での一つなものは、議論に応じて個(たとえば、座っている、教養ある「ソクラテス」)としても、種(たとえば、二本足の動物である「人間」)としても、類(たとえば、本性上上昇運動をする「火」)としても言表のうちに立てられることができるけれども、まさにそのことによって、それ自体個でも種でも類でもない。つまりそれは、どのような言表形式において言表されようと、それ以前に存在し、しかもさまざまな言表がそれをめぐって成立するところの対象である。

いま実体がすぐれて一つである存在であるならば、そして実体を個か普遍かという認識論的な対立概念に当てはめることがアポリアを生む原因であるならば、『トピカ』が教えているような「一つの事物」の意味でそれを把え直すことが必要だと思われる。

そこで、アリストテレスに残されており、しかも根本的な難問はただ一つ、「一つの定義を成り立たしめるはずの、部分を持つ事物の一性」のアポリアである。

彼はZ 17、H 2、3で、物体構成のさまざまな仕方进行を考察して、諸部分から成り立ちはあるが、しかし部分のたんなる集合とはもはや言えないような全体を形成する要因を探索している。この作業が「部分を持つ事物が何によって一つであるか」の問題の解明のためになされているのは明らかであるが、細部に立ち入らずに結論を急ぐことにしよう。

アリストテレスが事物の質料的部分に初めて可能態の概念を援用したのはZ 16においてである。たとえば動物の諸部分は可能態であって、現実態の動物から離れていない。離れたらそれらはただの(動物にとっての)質料としてあるだ

けである。なぜなら、それらをかき集めてみても、あたかも穀粒の集積のようなものであって、一つのものにはならないからである (1040b5-9)。ここで述べられている質料的部分は、事物がそれへと滅亡する感覚的質料以上のものではないだろう。しかしこのような意味の質料もH 6で一つの実体のうちに収斂される。

彼が可能態と現実態の概念を使って難問を一挙に解決しようとするのはH巻の最後の6章においてである。「人間」を一つにするものは何か。「人間」が一つであって、「動物と二本足」のごとき多数でないのはなぜか」(1045a14-15)。

「一方「動物」が質料であり、他方「二本足」が形相であり、そして前者が可能態にあり、後者が現実態にある、とすれば、求められていることはもはや難問とは思われないう。つまりこの難問は、あたかも「衣」の定義が

「丸い・青銅」であるのと同じことである。つまり、この名(「衣」)は、事物の意義に当てがわれた記号であるから、実際に求められているのは、丸さと青銅が一つのものであることの原因は何か、ということである。そこで一方青銅が質料(素材)であり、他方丸さが形相(形姿)であるからには、もはや問いは難問にみえない。可能態にあるものが現実態にあることの原因は、生成する事物においてはそれを生むものをべつとして、いったい何があるか。(何もない。)なぜなら可能態における球が現実態において球であることの原因はほかならず、まさにそのこと自体が双方の本質だからである。ところで質料には可知的なものと可感的なものがある。そして事物の意義にはつねに一方の要素として(可知的)質料と他方の要素として現実態(形相)がある」(1045a23-35)。

質料的事物の本質「Xであること」は、質料の「可能態においてXである」本質と、形相の「現実態においてXである」本質を含んでいる。一つの事物の質料と形相であるかぎり、両者はXである本質においてなんらの違いもない。両者が異なるのはただ、その事物が質料的部分へと滅亡して一つのものでなくなるときにおいてである。だとすれば両者

が一致するのは、事物が一つのものとして生成し、一つのものであり続けるかぎりであろう。

事物の一性は存在論的な一性である。アリストテレスはさきの文につづいて、端的な存在論的対象について次のように言う。

「しかしおよそ可知的であれ、可感的であれ、質料を持たないものは、ただちにそれぞれがまさに或る一つであるところのものである。それはまた、それがまさに或る存在である（実体であり、性質であり、分量である）ところのものであると同様である。それゆえ「存在」も「一」もそれらの定義に含まれないのである。そしてそれらの本質はただちに或る存在であると同様に或る一である。それゆえそれらのいづれにも或る一であること、或る存在であることの原因はほかにはない。なぜならそれぞれがただちに或る存在、或る一であって、「存在」という類、「一」という類に含まれるからでもなければ、個々の存在と一とはべつに「存在」や「一」が離在してあるからでもない」（1045a36-b7）。

いまソクラテスが質料のない人間であると仮定しよう。彼はただちに人間という存在であり、一人の人間であって、これが彼の本質である。それは、彼が「人間」という種に含まれるからでもなければ、彼とはべつに、唯一、普遍的「人間それ自体」が実在するからでもない。なぜならソクラテス自身が自らの本質と一致する人間という存在、一人の人間だからである。⁽²³⁾

またソクラテスが質料を持つ人間であるとしても事態に変わりはない。「一者の原因は何であるかと求めることと、或るものが一つであることの原因は何であるかと求めることは似たような（無駄な）ことである。なぜなら（1）それぞれのもは（ただちに）或る一であり、また（2）可能態にあるものと現実態にあるものは条件的に一である。したがって後者が一であるのは、ただ可能態から現実態へと動かすものがあるならば、という条件以外になんらの原因もない」

(1045b19-22)。

人間が以上のような理解において実体的な一つの事物であることを前提したうえで、人が『トピカ』のレベルでそれを「人間」と名付け、「二本足の動物」と普遍的に定義づけ、ソクラテスやカリ阿斯などを、「人間」の名およびその普遍定義で表わされる個別的主語とする、と言表上の約束をするのであれば、そこにはなんの支障もないだろう。⁽²⁴⁾ 支障はただ、「事物として一つ」であるはずの実体を、個として一つなものか、種として一つなものかと混同するときに起こるのである。

このようにしてようやく、アリストテレスはZ4で立てた「第一義的に、端的な定義、および本質は実体にある」要請を自己の主張にすることができたのである。「実体とは何であるか」。それは第一義的に、端的な定義の対象になるところの、本質と同一な事物のことであると、彼は主張するであろう。

注

(1) Z巻とH巻がつながった論述であることには信頼性があると思われる。H1の冒頭でZ巻の議論の要旨が述べられ、そこから結論を出す (*conclorific*) 決意が語られており (1042a3-22)、またアリストテレスは両巻で再三、感覚的実体を研究課題にすることを表明しているからである (Z3.1029a33-34, Z11.1037a13-14, H1.1042a24-26)。Z巻の構成については、中間にある7〜9章が実体の生成にかかわる問題を扱っていて、H1の要旨もそれに触れていないことから、独立した論文とみなされるのが通常である。それが前後関係の不一致から、編集者による挿入であるのが事実だとしても、感覚的実体の概念を理解するために参考になる内容を持っているから技術上の問題はない。むしろほかに技術上の問題があるとすれば、それはZ巻だけでまとまった論考になっているとして、そこからなんらかの結論を引出そうとする研究態度であろう。H巻の冒頭が示しているように、Z巻にはさまざまな難問に逢着するアリストテレスの思考の軌跡が現われているのであって、問題はH巻に持ち越されるのであ

る。

- (2) Z1. 1028b2-4 「それゆゑ実に昔も今もたえず求められ、たえず問題にされてきたもの、すなわち「存在とは何か」——、これは「^{実体}実体とは何か」ということである」。

Z3. 1028b33-36 「^{実体}実体」は多くではないとしても、最大四つ（の特徴）において語られている。すなわち「何であるか」（本質）と「普遍」と「類」、第四は「基体」がそれぞれのものの実体であると考えられている」。従来の研究家は実体概念がそれら四つのどれかを合意するにちがいないとして、そこから結論を引出そうと試みてきた。しかしその結論も反証データに事欠かない。その結果、決着のつきやうにもない論争が続いている。しかしそのような事態が生じるのは、おそらく「思い込み」をした論者たちのせいであって、アリストテレスの責任ではなからう。なぜなら論者たちが遭遇せざるをえない困惑はほとんど実質的にアリストテレス自身になつて指摘されているからである。ちぎの四つの特徴は彼にとって実体概念を検討するための弁証論的な道具であつたと言つて差支えなうと思ふ。

- (3) 『範疇論』の実体論が実際は矛盾にみちたものであることは、拙論「アリストテレスの範疇教説と *Categoriae* (II)」(慶應義塾大学三田哲学会『哲学』第79集、一九八四年)で示したとおりである。
- (4) D. Ross, *Aristotle's Metaphysics* II, 1924, 1970, pp. 159-160; I, p. Ixxxviii.
- (5) *Ibid.*, I, p. Ixxxiii.
- (6) *Ibid.*, I, pp. ci, cxi, cxv.
- (7) J. Owens, *The Doctrine of Being in the Aristotelian Metaphysics*, 1951; R. Albritton, *Forms of Particular Substances in Aristotle's Metaphysics*, *Journal of Philosophy* LIV, 1959; J. L. Ackrill, *Aristotle the Philosopher*, 1981.
- (8) G. E. L. Owen, The Platonism of Aristotle, *Proceedings of the British Academy* 50, 1965; M. J. Woods, Problems in *Metaphysics* Z, Chapter 13, *Aristotle, A Collection of Critical Essays* ed. J. M. E. Moravcsik, 1968; G. J. Hughes, Universals as Potential Substances, *Aristotle's Metaphysics*, *Notes on Zeta*, 1979.
- (9) C. H. Chen, Universal Concrete, A Typical Aristotelian Duplication of Reality, *Phronesis* IX, 1964; J. H. Lesher, Aristotle on Form, Substance, and Universals: A Dilemma, *Phronesis* XVI, 1971.
- (10) ὅπερ γὰρ <τόδ> τι ἐστὶ τὸ τί ᾗ ἐστιν. 括弧内は「^何何」の補記である。同じ言ひ廻した二處 a4, 5 に記されている

ら、補足どうりに読んで差支えないと思う。

- (11) Z 6 は、実体概念の成立の背後にイデア概念が先行することを示す、きわめて重要な章である。アリストテレスのイデア論批判を強調しすぎることには実体概念の健全な理解のために妨げになる。
- (12) 「実体」の二義を説く注釈家ロス（はじめに参照）が Z 6 に考慮を払わないのは不可解である。
- (13) *εἶδος* —— この中性形のギリシア語はほんらい形容詞である。それはまず、比喩的用法を除けば一般に鼻を持つもの（たとえばゾクラテス（プラトン『テアイテトス』143E 参照）を形容するために使われる。しかしそれはまた鼻を形容する（Liddell-Scott）。明らかに中性形は名詞としても使われ、それだけに「凹んだ鼻」*κοῖλῃ ῥίτι* を意味する（*Met. El.* 1025b33, K7.1064a26）。*οὐκ ἐστὶν ἐνὶ τῷ ῥίτι* として、鼻先が上を向っている鼻のことである。英語の *snub* の用法も同じである。
- (14) Cf. *Soph. El.* 13.173b5-7, 31.181b36, *Anul. Post.* A4.73a37.
- (15) *ἡ δὲ σῆμα* アリストテレスは「衣」*ἱμάτιον* という語を人為的にそれと無関係な複合的意味に当てがう手法を使う。Cf. Z4.1029b27, H6.1045a26, IV 節参照。
- (16) *ἡ δὲ* と言う定義は論理学上の定義のことである。『分析論後書』B 13 参照。
- (17) H3.1043b14-18, H5.1044b27-29.
- (18) ロスは、「鼻が二度云々」は文脈に関係ないから筆記者のミスであるとして、この文の削除を提案している（*Op. cit.* II, ad locum）。しかしすべての写本と古注にある文章を保存する権利は誰にもある。
- (19) 可感質料というのは感覚物の質料（たとえば青銅の円の青銅）であって、感覚物が生成消滅する基にある。可知質料とは感覚物のうちにあるけれども、成る程度抽象的であって、たとえば数学的認識の対象になりうるもの（円の線や延長など）である（Z10.1036a2-12, Z11.1036b35-1037a5, H6.1045a33）。
- (20) 拙論「アリストテレスの『第三の人間』論とイデア論批判」（西洋古典学研究 XXXI、一九八三年）参照。次注参照。
- (21) Cf. *Met. A* 14.1020a33-b1, *Top. A* 2.122b16-17. 『エニカ』A 6 (103b27-39) では「インターカテゴリアルな何であるか」と「カテゴリアルな何であるか」（実体）が区別されている。普遍定義述語は前者を表わすことを意図し、かつそれにかぎられる。なぜならそれはカテゴリアルには分量なり性質なり、その他の非実体的なものを表わすただだからである。『エニカ』のこの箇所と『詭弁的論駁』22 (178b38-39, 179a8-10) での『形而上学』Z 13 (1036b35-1039a3, cf. B6.1003a8-9, K2.106b20-

(21) は、普遍述語が実体を表示しないとする点でまったく一致している。

(21) もしB巻(およびK巻)がZ巻よりあとに書かれたとしても大差はない。その場合アリストテレスはZ巻で得られた結果をもとにして「難問集」に書き記したことになるだろう。要は矛盾が自覚的なものか、無自覚なものかのちがいである。

(22) たとえば、28.1033b30-32「生むものは生み出されたものと同じようなものである。ただし同じものではない。両者は数において一つでなく、エイドスにおいて一つなものである」、1034^a7-8「カリ阿斯とソクラテスは、質料のゆえに異なる(質料はべつであるから)。しかしエイドスにおいては同じである(エイドスは不可分であるから)」といった表現は読む者を悩ませるのである。

(23) Cf. T. 2.1003b26「人間も、一人の人間も、あるところの人間も同じことである」、Soph. El. 6.169a7-10「ただ一つの事物の定義も、端的な事物の定義も同じである。たとえば人間の定義も、ただ一人の人間の定義も同じである」。

(24) アリストテレスにとって、「人間」の定義を「二本足の動物」とするのは約束事である(cf. T. 4.1006a31-b4)。「二本足」はプラトン(『政治家』266 E et alibi)からの借用らしい。